言語ニュアンスと文化的背景
—心情を表す形容詞の伝達の壁—

本地　裕彦

1. はじめに

人類が今日の繁栄を実現させたのは、ひとえに言語を獲得したからに他ならない。原始狩猟民族や原始農耕民族が、言語を媒介としたところの他者とのコミュニケーションを可能とした日から、人類の共同体社会は比類なき発展の道を歩み続け、加速度的に文明国家へと見事な変貌を遂げてきた。与えられた時間と空間の共有を礎に、人類は言語をもって共に奮闘し、その発展に悦びを分かち合い、自らの力の無限性を信じた。そして、発展に裏打ちされた思想が文明の未来を約束し、人類に永劫の繁栄をもたらす ..... はずであった。

だが、言語の獲得は同時に、「言葉は人間の真の本質を見誤る可能性がある。」（モーリス・ブランショ、『言語と文学』、書肆心水、2004）ということを教えた。それは、言語がもつ記号的役割、心理学的役割、コミュニケーションの役割など、それらの構造体系を総合的にもってしても、すっぽりそのまま人間の本質的な枠にはめ込むことができないということを意味する。ブランショが指摘するように、もし人間がすべて論理的な存在であるならば、言語の構造体系を人間はそのまま受け入れ、そして、そのまま言語を媒介として、対象の“すべて”を他者へと伝達することが可能なはずである。一方、もし人間が非論理的な存在であるならば、言語の構造体系をそのまま受け入れたとしても、必ずや言語では表出しきれない人間の“余白”があることを知り、つまり、言語表出だけではどうしても人間の本質的な枠にはめられない領域（概念）があるということを知るのである。

果たして人間は論理的存在であるのか、あるいは非論理的存在であるのか。それに答えを見出せない者はいないであろう。誰もが人類の未来永劫の繁栄に疑いをもつのは、過去の長い歴史の中で、何度も言語では伝わり切らなかった人間の“余白”に存在する不透明さを皆が知っているからである。そして、時には不可解ということばで表現されてきたその不透明さから、人類は全くもって非論理的に文明の相互破壊や人間の相互殺戮を行ってきたのである。繁栄であったはずの文明の進歩が、20 世紀においては人類社会に壊滅的な打撃を与え、もはや人類は生きる方向性さえ見失いかけた。埴谷雄高が指摘したように、20 世紀は戦争の時代であった。20 世紀は、人間がもつ非論理性によってこうした悲劇が繰り返され、そして、人類はそこから突き落とされた絶望に人間の本質を見た思いがした。それは同時に、言語によって構築されてきた思想の瓦解を知らしめることでもあったのである。

ならば、言語がもつ意義とは何か。そして、言語は今後どのような役割を担っていくのか。ここで考察すべきことは、涙や笑いに垣間見る人間の真の交感を明らかにし、言語では伝え切れない人間の“余白”にあるものに光を当てることによって、再度言語の役割を認識する

ことにある。と同時に、第二言語習得における人間の“余白”からくるコミュニケーションの限界とは何か、それをも視野に入れなければならない。

2. 言語の普遍性

チョムスキーによる言語獲得理論（生成文法）の登場は、それまで人間の現実の発話の集合体（コーパス）を研究していた構造言語学の研究姿勢を一変させることとなった。人間が日々生活をし、社会生活を営むということは、あらゆる人間行為とそれに関わる対象に意味をもつということになる。それは実体があろうとなかろうと、言語の統語と音韻と意味を柱としてある概念を表出することを可能にしているわけだが、その概念は言語を通してすべて恣意的に記号化される。チョムスキー以前の研究では、恣意的に記号化された言語を研究対象として、具体的な文がどのような規則性をもつのかを明らかにしてきた。しかし、チョムスキーは、人間には初めから言語を獲得する装置を脳が有し、それが等質の同一言語の共有を可能にしているという理論を構築したのである。

この画期的な理論は、それまで社会言語学の分野において、言語習得を大きく左右する条件として考えられている個人の年齢・性別・能力・意欲・動機・性格といったものや、また、社会の地域性・文化性などの問題を捨象しているということになる。脳の解析は最早言語学の領域を越えているが、人間が言語を獲得する絶対的装置をもつということは、非現実的な言語、即ち発話されない言語を有するということでもあり、その水面下の装置の働き如何でスイッチは言語にも“余白”にも入るということになる。その分岐点は明確ではないが、いずれにしても人間は予め言語獲得装置を有していても、人間のコミュニケーションを図るうえで言語として伝達するか、あるいは、非言語として伝達するか、その選択は自由である。つまり、「目は口ほどにものを言う」という手段を地で行くのである。

従って、今日において人間のコミュニケーションとは何かを考察する場合、次のように整理することが可能となる。

1. 人間は生得的に言語獲得装置を有する（生成文法）ということを前提とするなら、人間が何かを伝えようとした時、言語を用いるか用いないか、その選択は自由である。
2. 人間が何かを伝えようとした時、言語を選択して伝達されるものは、統語・音韻・意味を柱とした文法的規則と、社会言語学的条件によって大きく影響される。
3. 人間の言語による伝達とは、言語獲得装置によって得た等質の言語に社会言語学的条件を加えることによって成り立つ。

以上の３つの項目を踏まえたうえで、具体的に第二言語習得における問題を浮き彫りにさせ、更に言語の普遍性について考察する。

我々が数年をかけて習得する第一言語は、本人の意志に関わらず脳の勝手な指令によって身に付いていく。身近にいる親の具体的なことばを聞いて学習し、それがたとえ乱れたことばであったり、非文法文であったりしても、やがてその間違いさえ理解できる応用力を自然に習得していくのである。即ち、特殊な事情を除いて、本人が仮に望まなかったとしても、ことばの習得を拒否することはできない。第一言語は言わば勝手に走っていくのである。そ

して、学習環境に揉まれながら自由に使いこなすことができる言語として、我々はそれを母語と呼んで社会生活を営むこととなる。

それに対して、第二言語習得の習得過程は全く違ったルートを辿ることになる。バイリンガルやトリリンガルのような複数言語を自由に使いこなす能力を有している者は、第一言語・第二言語というカテゴリーには分けられない、全く不可分な複数言語の時間的・空間的環境を生まれながらにして共有している状況にあることが多い。たとえば、国際結婚による母語の異なる親を両親にもつ子供は、同時進行で二つの言語に接し続けるであろうし、また、母語を同じくする両親が何らかの理由で外国で生活を続けている場合、その子供は家庭内・家庭外で両親の母語と生活する場のことばとを見事に使い分けることができるようになるのである。

複数の言語習得を目指す場合に、こうした言わば恵まれた環境にある者は別として、ここでの第二言語習得は、第一言語を体系的に習得した後にそれを目指す場合を見なければならない。更に、家庭環境・生活環境・社会環境すべてにおいて使用言語が母語に限られる状況下で、第二言語の習得者が大人であるという条件を付け加える必要がある。つまり、教室という限られた空間で、大人の第二言語習得者は何をどう学んでいくかということが問題になるのである。

我々が話すことばは、その音と意味の恣意的な結び付きである概念を表出する。たとえば、我々は「青い空」「広い海」ということばを聞いて、脳裏にその具体的イメージを直結させることができる。「あおい」＋「そら」という恣意的な音の組み合わせで、間違いなく「青い空」、即ち頭上高く広がる宇宙空間と大気の境目に地球の屋根の如く広がる世界を「そら」と呼び、目に映った晴れ渡るその色を「あおい」と呼んで具体的な「空」の概念をもつのである。「広い海」も認識の方法は全く同様である。即ち、認識する対象が実体のあるものであろうとなかろうと、すべてのことばは意味をもつ記号として一つの概念を表しているわけである。そして、「そら」や「うみ」は如何なる恣意的な音と文字を組み合わせようとも、その対象は人類共有の財産とも言える不可侵の領域であり、記号がもつ意味にずれを生じさせることはあり得ない。即ち、日本語で「空」や「海」と表現している対象を何語で表出しようとも、その概念は常に普遍的な世界を表すということになる。従って、コミュニケーションを図る人間同士の母語が異なる場合、それがたとえ「青空」であろうと「梅雨空」であろうと、あるいは、「荒海」であろうと「泥海」であろうと、基底となる概念の普遍性が崩れることはないのである。

ところが、この地球上には数多くの民族が存在し、それと同時にそれだけの言語が存在することになる。否、同一民族の中にも複数の言語が存在することを鑑みれば、この地球上に一体いくつの言語が存在するのか計りしれない。どんなに少なく見積もっても 3000 の言語があると言われているが、少数民族の更に小さな部族で使用されている言語まで正確に把握することは不可能であろう。そして、それらの言語の一つ一つがもつ記号として表出された概念を正確に把握することも困難であると言わざるを得ない。それぞれの生活環境・風俗習慣の中で構築されてきた言語体系は、長い時間をかけて形成されてきたものであるが故、他の言語との同化という現象は簡単には起こらない。そして、各民族（部族）のことばのやりとりにおいて、他の言語に置き換えることを許さない独自の概念を有するものもあり、それ

がいわゆる“通じない”世界を作り上げていくことになる。

その“通じない”ことばの概念は、人間個人の外にあるものを表出しようとした場合と、人間個人の内にあるものを表出しようとした場合では、伝わる程度が大きく異なる。たとえば、民族衣装として有名な「チマチョゴリ」や「アオザイ」は、固有名詞としてそれを日本語に置き換えることを許さない。それらの衣服は一度目にすれば正確に概念を掴むことが可能だが、朝鮮民族の「恨（ハン）」の概念はどうであろうか。これは、人間の内に存在するものであり、心の奥底にある感情の概念を、「恨（ハン）」ということばで記号化しているわけだが、果たして民族の違う他者は、その人間が表出するところの「恨（ハン）」の概念を共有し理解することは可能であろうか。そこには伝わらない世界が間違いなくある。言語表出から滑り抜けた人間の“余白”がそこにはあり、他者は表出された記号を、その意味を何となく分かったフリをして聞き流しているに過ぎないのである。

人間の内にもつ複雑な感情とは、個人の感受性によって程度の差こそあれ、喜怒哀楽の四分割では到底済まされない、実に厄介で掴み所のない世界である。この感情の概念を言語表出しようとした場合、我々はどこまで正確にコミュニケーションが図れるのか。特に外国人が日本語を第二言語として習得しようとした場合、母語ではない日本語の心情を表す形容詞に触れた時、果たして彼らは日本人の“こころ”を理解できるのであろうか。たとえ日本人がどんなにことばを通して心情をさらけ出したつもりになっても、それが果たして外国人一人一人の心情にぴったり重なり合うものなのか。実に視界不良な壁がそこにある。

3. 心情を表す形容詞

日本語を母語としない外国人が、日本語を第二言語として習得しようとした場合、困難を極めるいくつかの問題がある。周知のように「漢字」「敬語」「待遇表現」などはこれまで何度も指摘されてきたことだが、それだけではなくカタカナ語の氾濫、省略の多い若者ことばや業界用語など、その日本語の流動性に学習者は頭を悩まされる。そして、第二言語習得の為の教授法が様々な形で試されてきているが、効果が大きい直説法においても絶対的な方法というものは存在しない。

従って、教育現場では様々なストラテジーが用いられるわけだが、あるいは、習得者自身が様々なコミュニケーション・ストラテジーをとって第二言語の理解を深めていくのだが、教室という限られた空間において、目標言語の一歩手前の習得までにしか至らないということはままにしてある。それは、教室が目標言語が用いられる日常生活の環境とはかけ離れており、また、目標言語でコミュニケーションを図る必然性がそこに存在しないからである。従って、目標とする第二言語の言語体系とは若干異なった中間言語で習得者はコミュニケーションを図るということになる。

更に、教室の外にある文化的背景を知らずして、目標言語のことば一つ一つの微妙なニュアンスの違いを把握していくのは学習者にとって負担が大きい。確かにそれぞれの言語によって表出された対象は、全く違った概念を意味しているわけではない。内包された本質的な意味は存在する。第二言語習得の初期過程においては、辞書を頼りに母語に翻訳をし、母語を通して概念を理解することによってコミュニケーションを可能にしているが、それは概念の普遍的な部分の翻訳である。つまり、言語を通して表出された概念の外延の部分まで把

握しているとは言えないのである。ことば一つがもつカテゴリーは広く、理解したようで理解していない外延の部分があることを認識していなければ、目標言語には届かずに中間言語だけで分かったつもりになってしまう危険性がある。特に、心情を表す形容詞の世界では、人間の複雑な“こころ”のもつ世界を対象とするだけに、言語を通して表出される外延をも含んだ概念の把握は相当努力を要するのである。

さて、その日本人の“こころ”だが、この“こころ”とは一体何か。知性・理性を意味するmindか、喜怒哀楽のheartか。日本語で表現する“こころ”は「痛む」「動く」「通う」「騒ぐ」「弾む」「晴れる」「乱れる」存在である。この“こころ”の普遍的な概念をイメージすることは難しい。特に知性や理性で線引きできない対象を言語表出しようとした場合、各人それぞれがその音韻や文字だけで本質的な概念を把握することは可能であろうか。「悲しいからこころが痛む」、「嬉しいからこころが弾む」のであろうが、“こころ”はどこにあり、何をもって「悲しい」や「嬉しい」と表現するのか。一体その心情は如何なる基準で測ることが可能であろうか。心情を理解するとは、ことばでは言い尽くせない共感するものをそこに認め、そして、正に何となく自分の内にその気持ちをもつということである。その“何となく”もまた概念に含まれるのである。

しかし、ことばにならない涙や笑いの交感に必然性がない以上、ことばでは言い尽くせない互いの心情を完全に伝達することは不可能である。人間の社会生活の基底をことばと“こころ”の交流とするならば、実は人間はその“何となく”理解している部分に依存する度合いも無視できず、ことばだけで互いにコミュニケーションを十分に図っているわけではないのである。従って、教室という非日常で行われる第二言語習得は、教授する側が人間には言語表出では不可能な“余白”があることを認識し、どこまでその壁の切り崩しが可能であるかを試みながら言語を教える必要がある。ことばの一つ一つがもつ微妙なニュアンスはどこから来るのか、その文化的背景を理解してこそ、目標言語に近づく道でもある。

※　　※　　※

言語は曖昧である。その言わば言語の意味の揺れに包まれている曖昧さから、外国人はどのように日本語で表出された概念を理解しているのであろうか。特に、心情を表す形容詞において、人間がもつ“こころ”の多重性をどう把握しているのか、それが大きな問題となる。

別紙（表1～10）の調査は、ある日本語学校で日本語を第二言語として学ぶ学習者が、心情を表す日本語の形容詞から何を直感的にイメージするか、それをまとめたものである。イメージは対象とする概念の一部分でしかないが、学習者のことばの理解度を知るには大いに役に立つ。

学習者の国籍は、韓国人23人（男8、女15）、中国人19人（男6、女13）、ミャンマー人1人（女）、フィリピン人1人（女）であり、日本語学習歴は2~3年である（ただし、フィリピン人は在日10年以上）。年齢層は20代前半が中心である（フィリピン人は40代）。調査する日本語の形容詞は「おそろしい」「かなしい」「さびしい」「たのしい」「はずかしい」「うらやましい」「くやしい」「なつかしい」「むなしい」「わびしい」の10単語である。

これらの単語のうち、「おそろしい」「かなしい」「さびしい」「たのしい」「はずかしい」

は初級レベル、「うらやましい」「くやしい」「なつかしい」は中級レベル、「むなしい」「わびしい」は上級レベルの語彙である。

心情を表す形容詞は他にも「いまいましい」・「いとわしい」・「やましい」など、日本人でもその“こころ”の状態をことばで説明するのは難しいものがあるが、ここでは第二言語習得において必須と思われる日本語の代表的形容詞を取り上げている。特に、日本人の伝統的な美徳概念として指摘される「わび・さび」の世界や、R・ベネディクトが『菊と刀』で指摘した日本人がもつ「恥じの文化」などは、こうした心情を表す形容詞の本質的な意味を、日本語を母語とする者がどのように捉えているのかを知らなければ、外国人がその世界、その概念を一面的に理解する可能性がある。そして、外国人が直感としてイメージしたものと、日本人が普遍的にもっているであろう概念との差異を明らかにすることによって、逆に第二言語習得の近道を示すことができるのではないだろうか。

（「言語ニュアンスと文化的背景」）　※（）内数字は複数回答数

表１「おそろしい」の直感的イメージ

	韓国	中国	フィリピン	ミャンマー
男	人間 (2)・泥棒 (2)・戦争・死・ビザ・一人暮らし	殺人・未来・幽霊・無知・頭・世間		
女	怖い (4)・殺人 (2)・事故・将来・日本人の考え方・失敗・試験・地震・猫・ストーカー・結婚	お化け (5)・地震 (3)・事件・動物・女・物価・不合格	人生	試験

まず、形容詞「おそろしい」から取り上げる。「おそろしい」と敢えてひらがなにしてあるのは、「恐」の字を使ってアンケートをとると、その表意性から漢字圏と非漢字圏の学習者では自ずと意味の理解力に差が出て、直感的イメージを調査する上で公平を保つことができないからである（以下、どの形容詞でもひらがなを使用する）。

ここで注目すべき答えは、韓国人男性の「ビザ」、韓国人女性の「試験」、中国人男性の「無知」、中国人女性の「不合格」、そしてミャンマー人女性の「試験」である。彼らはすべて就学生として滞在し、最長２年まで日本語学校で日本語を学ぶことができる。許された滞在期間中に第二言語として日本語の習得を目指すわけだが、実際本国の大学を休学して語学留学している学生を除き、ほとんどの学生が日本で大学・大学院、または専門学校の進学を目指している。

従って、「おそろしい」というイメージは、彼らが置かれている状況に引き寄せられ、身の危険を感じるような恐怖、即ち「戦争」・「殺人」・「死」といったイメージよりも、「ビザ」や「試験」の方が恐怖の対象になっているのである。「戦争」・「殺人」・「死」ということばに共通してある人間の死を、「おそろしい」ということばによって表出される普遍的な概念とするなら、「ビザ」や「試験」は言わば環境に侵食されたイメージということが指摘できる。それは明らかに学習者個別の付加された概念なのである。

この「おそろしい」を日本人作家の文学作品から見てみると、以下のような表現がある（傍

点は筆者、以下同様）。

「地獄変の屏風と申しますと、私はもうあの恐ろしい画面の景色が、ありありと眼の前へ浮んでくるような気がいたします。」（芥川龍之介『地獄変』）

芥川の脳裏にあるのは「死」である。作品の主人公である絵仏師良秀は、芸術至上を貫徹するなら愛娘の死さえ絵の題材にする。燃え盛る牛車の中で苦しむ娘を見ながら最高の屏風絵を完成させる物語はよく知られているが、芥川の「おそろしい」は人間が人間であることの恐ろしさ、その徹底した人間性追究の思想が背後にある。

つまり、日本語の「おそろしい」という世界は、単に恐怖感を呼び起こす源ということではなく、人間の手ではどうすることもできない人間存在そのものをも視野にいれているということが指摘できるであろう。

表２「かなしい」の直感的イメージ

	韓国	中国	フィリピン	ミャンマー
男	死 (3)・別れ (2)・恋・涙・今	親の死・別れ・友達・家族・帰国・物語		
女	別れ (5)・死 (4)・涙・母・不合格・悲劇・事故・本	死 (4)・別れ (2)・不合格 (2)・病気・失恋・おじいさん・故郷・今	不合格	兄

「かなしい」は「死」と「別れ」のイメージが圧倒的に多い。もちろん、彼ら外国人のみならず、人間は一つの単語に対して一つの意味しかもたないわけではないが、直感からくるイメージは、人間のプラス志向・マイナス志向に大きく影響される。従って、人間個人がいかなる状況に置かれようとも、そのことばのイメージに統一性が強いものほど“こころ”にもつ概念のブレは少ないと言える。「かなしい」はその意味で非常に理解しやすいことばである。涙に直結したことばと言っても過言ではないであろう。

表２のミャンマー人女性の「兄」、韓国人女性の「母」、中国人女性の「おじいさん」には特殊な事情がある。特にミャンマー人女性の兄は、本国の軍事政権に対する反対運動で自由を奪われている身である。こうした外部からの強い要因が概念に深く入り込むことがあり、言語表出の個人的制約を形成していく場合がある。つまり、誰もが理解していると思われることばほど、その固定された一つのイメージを打ち破ろうとすることば自身の反動がある。

「『駅長さん、弟をよく見てやって、お願いです。』、悲しいほど美しい声であった。」（川端康成『雪国』）

ここで川端は主人公島村にどんな声、どんな声音を聞かせたのか。弟思いの娘葉子、島村が脳裏に聞いたその彼女の声音には、何人も近づけない。それは文学だからではない。音の世界はいかなる言語表出をもってしても正確に記号化することは不可能だからである。文字で音を正確に記号化することが不可能である以上、川端が描いた「悲しいほど美しい声」を再現することはできず、読み手は恣意的にその声音を脳裏に奏でるのである。そして、日本

人がもっている胸がつまる響きを、何となく感じるしかない。

この「悲しいほど美しい」という表現を外国人はどのように理解するのであろうか。女性の哀感を描いたら右に出るものがいないと言われる川端文学の世界を意識していなければ、この「かなしい」対象は作品からかなり遠い辞書的な概念として理解されるに違いない。そして「悲しいほど美しい」という表現にむしろ違和感をもつのではないだろうか。

日本語の「かなしい」は「いとおしい」という心情を含むのである。美が美しすぎると、それは「かなしい」のだ。

表３「さびしい」の直感的イメージ

	韓国	中国	フィリピン	ミャンマー
男	別れ (2)・一人 (2)・愛・失恋・山道・病気の時	留学生活 (3)・独身 (2)・一人暮らし		
女	一人 (5)・一人暮らし (3)・日本の生活・別れ・秋・留学・寒さ・彼氏・結婚	一人暮らし (4)・孤独 (2)・友達 (2)・雨天・外国・人間・夜・冬	規則	一人暮らし

「さびしい」に共通しているのは、「一人」、もしくは「一人暮らし」である。本国を離れ留学生活をしている彼らは、当然孤独感を背負っている。家族がいるわけでもなく、また、日常的なコミュニケーションをとる日本語力は有していても、様々な場面でことばの壁にぶつかることがある。そのストレスが一層孤独感を強める。つまり、「さびしい」というこころの状態は、できれば避けたいという心情の表出である。

ところが、韓国人女性が「彼氏」・「結婚」と答え、また、フィリピン女性は「規則」と答えている。「さびしい」ということばからは多少離れたイメージであるが、これもそれぞれの日本に置かれている状況が、ことばの意味に大きく影響しているということである。在日十年以上になり日本人配偶者をもつフィリピン人女性が、「さびしい」と聞いて「規則」と答えている事情は、日本での生活がフィリピンに比べて規則で雁字搦めになっているということではないだろうか。

「人を喜ばす事は悪い事ではない。自分は当然、ある喜びを感じていいわけだ。ところが、どうだろう、この変に寂しい、いやな気持ちは。」（志賀直哉『小僧の神様』）

日本語の「さびしい」には、深い意味がある。貴族院議員のＡは、秤屋の小僧仙吉にすしをご馳走する。仙吉は自分がなぜご馳走されたのかも分からずに三人前を平らげる。Ａは、その自分の行為に対して、言わば施しに対して妙に「さびしい」気持ちを抱くわけである。このさびしさは、留学生たちが抱く孤独感とは違う。身分の高い立場にある人間が、なぜそうするのかを伝えずに施しを行うことが、純粋な子供のこころを傷つけ、それが結果的に偽善的行為でしかないのではないか、そこにＡは「さびしさ」を感じるのである。

ある対象を「さびしい」と形容する場合、孤独感だけでは片付けられない、明らかに非人間的なエゴがある。「わび・さび」の「さび」とは、そうした孤独の中にある他者を排斥する静寂に美徳を感じることにある。単なる閑寂の趣だけではない。

表 4「たのしい」の直感的イメージ

	韓国	中国	フィリピン	ミャンマー
男	学校・友達・旅行・生活・歌・教会・ディズニーランド・二人	旅行・友達・自由・散歩・結婚・イベント		
女	遊び (4)・友達 (3)・旅行 (2)・日本語 (2)・音楽・買い物・ジャンプ・ディズニーランド	遊び (3)・遊園地 (2)・食事 (2)・留学・友達デート・祝日・アルバイト・記憶	明るい	日本

外国人の日本語習得者は「たのしい」をしばしば「うれしい」と混同する。「たのしい」は実際に自分がその場で何かを体験している時の心情の表出であるが、「うれしい」は、自分の行為を問うわけではない。「うれしい」知らせは外から来る。その意味で、ここで挙げられたイメージは、すべて彼らが実体験として認識しているもの、あるいはそれに付随しているものと判断できる。従って、答えも様々であるが、その心情の本質にあるものは人間のこころをうきうきさせるものなら何でもいいということになる。「たのしい」は「かなしい」同様ブレのすくないことばであろう。

「『楽しい日？』とお志保は寂しそうに微笑みながら、『私なぞにそんな日が御座ましょうかしら』」（島崎藤村『破戒』）

『破戒』に貫かれている人間の平等とは何かを問う姿勢は、主人公の教員瀬川丑松が部落出身であることを告白するというテーマだけに非常に重い。人間が生きることが即ち不条理であり、それを支える差別構造はいつの時代にも付いて回る。丑松を助けようとする親友銀之助は、丑松が思いを寄せていたお志保を訪ね、彼女に丑松を支えてほしいと頼む。貧困に喘ぐお志保もまた逆境の中で必死に生きている。それゆえ、彼女の口から出る「たのしい」は、言わば社会がもつ差別構造を糾弾することばでもある。お志保の「たのしい」の根源は、人生を生きることが即ち楽しくないのであり、それゆえ追い求める世界でもある。

表 5「はずかしい」の直感的イメージ

	韓国	中国	フィリピン	ミャンマー
男	人前・成績・失敗・会話・覗き・思い出・おなら	見合い・間違い・ダンス・酔い・日本語・自分の文		
女	失敗 (2)・発表 (2)・赤ら顔・思春期・涙・初恋・熱・無知・秘密・服・自己紹介・授業・やる気	失敗 (4)・スピーチ (2)・不合格・失言・顔・成績・日本語	失敗	試験の点

人は恥ずかしさをどこで感じるのであろうか。外国人就学生の答えの多くが日本語習得の未熟さから生まれる「はずかしい」気持ちであり、それは自己表出が思うようにできないもどかしさでもある。この「はずかしい」と思わせる心情こそ、もっとも語学学習に邪魔なもので、第二言語習得におけるコミュニケーション・ストラテジーの回避に当たる行為を生む。「人前」「発表」「失敗」「スピーチ」「日本語」などは、すべて負の要因として学習意欲を低下させるものとしてのイメージと考えられるであろう。「はずかしい」ということばで表さ

れる心情はどこから来るのか、そして、その源に人間として、あるいは民族として差異をもつのか否か、その実体は不透明であるが、少なくとも「はずかしい」心情の程度の差が語学の習得に影響することは間違いない。

「『爺さんも気の毒ですよ。町内のお方にお恥ずかしくて、このままにしてはいられないと云って、西鳥越の方へ越して行きましたよ』」（森鷗外『雁』）

一人娘の玉が妻子もちの巡査に誑かされたのを知った親爺は、もはやその場で暮らしていくことができない。娘が自殺を図る一歩手前まで追い詰められ、親としての面目を潰された親爺は、町内の人々の同情をかいながらも越していく。この「はずかしい」失態に対する逃亡は自責の念に耐えられないからでもある。その対極には自尊心があり、「はずかしい」心情の程度の差は自尊心の程度の差でもある。

表６「うらやましい」の直感的イメージ

	韓国	中国	フィリピン	ミャンマー
男	金持ち (4)・恋人・幸運・合格・やきもち	金持ち (2)・恋・全能・進学・先生		
女	美人 (2)・成功 (2)・金持ち (3)・合格 (4)・就職・恋人・能力・キリスト	美人 (2)・成功 (2)・優秀 (3)・幸福 (2)・就職 (2)・結婚	他人	就職

各国の経済格差からくる貧富の差が、外国語学習の動機へと走らせる一因となることは否めない。日本の経済力は隣国の若者たちにとってはまだまだ“ドリーム”の部分があり、母国の就職難を背景に日本で仕事を探そうとする者も多い。この「うらやましい」からイメージするもので、「金持ち」「成功」という答えが多いのは、就学生がいかに苦学しているかという証左でもある。そして、ここに取り上げられたことばのすべてが、彼らが現下には持ち得ないものばかりである。この心情がなければ、何事も始まらない。正に生きるエネルギー源が「うらやましい」で表される概念である。

「私と比べて、どうせろくな望みを抱いていないと思うと、…みなの心の裡の何もない無感覚な空洞が、軽蔑に値いするようにも、又、羨ましいようにも思われた。」（三島由紀夫『橋づくし』）

銀座の寝静まった夜の町、七つの橋を一言も口を聞かずに願掛けをしながら渡りきれば、その願いが叶うという。小弓、かな子、満佐子の芸妓三人に女中のみな、みなの願い事だけが作品では明かされない。そして、腹痛や思いがけない仲間との再会や、警官に呼び止められたりした結果、七つの橋を渡りきるのは不器量な田舎者のみなだけという皮肉。映画スターと一緒になることを夢見る満佐子に比べて、みなの望みは一握りの小さな夢かもしれない。しかし、田舎から出てきた女中の夢が下らなく思えても、それが「うらやましい」ものでもある。三島が書く「うらやましい」は、人間の純粋さに他ならない。

表７「くやしい」の直感的イメージ

	韓国	中国	フィリピン	ミャンマー
男	敗北 (2)・試合・勝負・警官・0点・苦労・法	失敗 (2)・日本語能力試験・不合格・成績・アルバイト		
女	失敗 (4)・敗北 (3)・壁・日本語・不合格・来日・はかりごと・殴られる・納得・選手	失敗 (3)・勉強 (2)・不合格 (2)・親不孝・病気・敗北・人生	忘れ物	差別

金田一春彦は日本語には人間の心理を表す語彙が豊富であることをしばしば指摘しているが、その中でこの「くやしい」は難物である。アンケートの回答を見ると、「警官」「苦労」「来日」「納得」という韓国人のイメージ、「アルバイト」「親不孝」「人生」という中国人、そして「忘れ物」のフィリピン人、「差別」のミャンマー人、とそれぞれが何のつながりもなさそうなことばを挙げている。共通する「失敗」は「はずかしい」のイメージにもつながり、実に人間が「くやしい」と感じる瞬間は多岐にわたっている。広辞苑を見ると「①後悔される。取返しのつかないことで残念である。②腹立たしい。しゃくだ。いまいましい。」という説明がなされているが、「くやしい」で表出される概念は掴み所のない妙にもやもやしたものかもしれない。敢えて指摘するなら、野卑なことばであるが、人間が「ちくしょう！」と口に出すその心情こそが「くやしい」世界である。

「おれの為めに、おっかさんが早く死んだんだと云った。悔しかったから、兄の横っ面を張って大変叱られた。」（夏目漱石『坊ちゃん』）

漱石のあまりにも有名な作品『坊ちゃん』は、主人公のその無鉄砲でまっすぐな気性が広く読者に愛され、願わくば自分もそうありたいと思わせるほどの純粋な世界である。「くやしい」時、「坊ちゃん」はすぐに仕返しをし、あるいは先手を打って相手を負かす。こうした人間関係の構築は、現実にはなかなか有り得ない話であり、人は「くやしい」思いをしながら耐え忍んで生きて行くことの方が多い。むしろ、「坊ちゃん」のべらんめえ調は日本社会の本音と建前には不向きであり、日本語の待遇表現にもまったく相応しくないものなのである。それゆえ、現実社会で忸怩たる思いで日常を堪えている人々に『坊ちゃん』は広く受け入れられ、そして実際には「くやしい」思いを噛み締めるしかないのである。「くやしい」とは、人間関係の厳しさの断面である。

表８「なつかしい」の直感的イメージ

	韓国	中国	フィリピン	ミャンマー
男	思い出 (2)・旅行・おもちゃ・料理・たまごっち・子供・昔	ふるさと・子供の時・おじいさん・母の料理・ラーメン・初級		
女	学生時代 (2)・ふるさと (2)・子供・幼年時代・家族・お婆さん・夕陽・。写真・さつまいも・国・ソウル	ふるさと (3)・思い出 (2)・昔 (2)・幼稚園・家・高校生・青春・歌・青椒肉絲	心がひかれるもの	ミャンマー

「なつかしい」ということばを聞いた時、故郷をイメージする人は多いであろう。事実、外国人である就学生たちの回答にも、生まれ故郷やそれに付随することをイメージした答え

が最も多い。「ミャンマー」や「ソウル」と、国名や地名を実際に挙げている学生もいる。「なつかしい」ということばで表出される概念の普遍性とは、人が生まれ育った場所から得た体験を、別の場所で再現させた時のその思いと言えるのではないだろうか。そこには景色もあれば、味もあれば、ことばもある。そして、その普遍性を越えたものに、人それぞれの「なつかしい」要素が付随するのだ。

「男としての私は、異性に対する本能から、憧憬の目的物として常に女を夢みていた。けれどもそれは懐かしい春の雲を眺めるような心持で、ただ漠然と夢みていたに過ぎなかった。」（夏目漱石『こころ』）

ここで漱石が用いている比喩は、主人公「私」の女性に対する気持ちが「懐かしい春の雲を眺める」心持と同じようなものであったということを表すものである。作品では雲を見る場所に触れられているわけではないが、読者は「私」が子供の時に見た春の雲を想像し、その雲がどんな形でどこに浮いていたかを勝手に思い描く。それが「なつかしい」のである。そして、作品では「漠然と夢みていた」異性に繋がって行く。自己がもつ心情の特殊性を表出するには、ことばの比喩に頼らざるを得ないが、それは飽く迄も近似に過ぎず、異性を思う気持ちが「懐かしい春の雲を眺める」気持ちに似ている世界は、実際に雲を掴むような実体がないものなのかもしれない。

表９「むなしい」の直感的イメージ

	韓国	中国	フィリピン	ミャンマー
男	努力・歳・人生・成績・一人暮らし・頭・ロト６・つまらない話	人生 (2)・一人・心・いい訳・自分		
女	人生 (7)・不合格・終わり・歳・大人になる・白・結果・お金・点数	言葉 (3)・人生 (2)・一人・ぶらぶら・空虚・心・頭・ぶらぶら・成果なし・秋の落ち葉	相手がいない	お金

上級語彙の「むなしい」は、漢字表記にした場合、「空しい」「虚しい」と二通りある。即ち「空虚」こそが「むなしい」ということであろうが、二十代である回答者の多くが「人生」と答えていることは注目に値する。日本で留学生活を送り、第二言語習得に向けて日々研鑽を積んでいる学習者が、人生に「むなしさ」を感じているのであろうか、あるいはただことばのイメージだけで「むなしい」人生を思い描いたのであろうか。いずれにしても、中身・内容がなく、実在を疑わしいとする考えは仏教につながり、この「むなしい」世界はアジア的と言えるのかもしれない。西欧の合理主義に比して、色即是空や空即是色はいかにも実体のない概念である。

「要するに、表面は空しく見せて其実豊かに、表面は無愛想でも其実親切を貴ぶのが小諸だ。」（島崎藤村『千曲川のスケッチ』）

既に詩人として出発していた島崎藤村は、長野県小諸市へ教師として赴任する。寒い気候で痩せた土地に暮らす人々は勤勉で、骨の折れる生活はさらに人を質素にするという。それは上田に比べて陰気であり、重々しい。だが、藤村はそうした人々の暮らしの中に生活上の形式主義を見る。そのおもて、表面が「むなしい」と書くのは、人間の実生活上の暮らしぶりなど、どこへいっても空虚なものだが、その空虚に見える日々の中にこそ人間が生きる本当の重みがある。やがて散文の世界に突入し、『破戒』の糾弾を生むことになる藤村の下地は、この小諸でしっかりと固めていたとも言える。若者たちが「むなしい」イメージを「人生」に短絡的に結びつけるのとは裏腹に、藤村は「人生」の重みをしっかりと受け止めていたのである。

表 10「わびしい」の直感的イメージ

	韓国	中国	フィリピン	ミャンマー
男	一人暮らし (3)・一人・別れ・帰り道・背・今	心 (2)・一人暮らし・家族・川辺・今		
女	一人暮らし (3)・一人 (2)・日本 (2)・友達・寂しい・暗い・文学・ビール・親・自縛霊	一人暮らし (2)・一人 (2)・友達 (2)・貧乏・心細い・雨天・夜・家・生活・作業服	人生	失恋

外国人にとって、日本語の「わびしい」と「さびしい」の差異を明確に認識し、使い分けることは難しい。「さびしい」同様、アンケートの回答には「一人」あるいは「一人暮らし」というイメージをもつ者が多い。これは、僅か数年の日本語学習では「わびしい」心情の真髄に届くことがないからだと思われる。「さびしい」イメージと重なるということは、留学生活における孤独感が尾を引いているのかもしれないが、日本人が何をもってそれを「わびしい」と表現してきたか、それを知るのはやはりことば以上のものを見なければならない。茶道などにおける「わび」の世界は、贅の対極にある質素と貧にこそ美の極致があることを謳っているが、人間の欲望を捨てた平穏の世界には、もはやことばは不要なのかもしれない。「わびしい」とは、長い間自然とともに歩んで来た日本人が、そうした人力による飾りを必要としない世界に身を投じる、その瞬間に味わう“こころ”の安寧なのである。

「その泥絵具のノスタルジックな色調が、遠い色情を培いながら、経て来た人生のどこを探しても見当らない、或る侘しい卑俗な恋の詩情に慶子は搏たれ、その新鮮な野卑に心を奪われた。」（三島由紀夫『天人五衰』）

三保の松原にある記念撮影用の絵看板、それは顔のところだけ穴があいた清水の次郎長とお蝶の姿である。世俗を知らぬ生活をしてきた六十七歳の久松慶子にとって、その絵看板の色調は「侘しい卑俗な恋の詩情」であり、そして「新鮮な野卑」であった。いかにも極彩色の文体をもつ三島らしい表現ではあるが、この「侘しい卑俗な恋の詩情」を絵看板から感じる慶子の心情をどう理解するか、文学の深い味わいがそこにある。日ごろ美術作品に浸る生活をしてきた者が、いきなり観光客相手の安手の絵看板を見た時、そこに一種の低俗で悪趣味な金儲けの手段を垣間見るに違いない。しかし、アメリカ占領軍の若い将校を情人にもち一生を遊んで暮らしてきた慶子はそうではなかった。次郎長が博奕打であることも知らない

彼女にとって、お蝶との二人の絵が卑俗ではあっても、「わびしい」恋の詩情を見てとるのである。それほどに世俗から乖離した生活を送ってきた者が感じる「わびしい」とは何か。それは、外国人留学生が感じるような孤独感などではまったくない。そこにあるのは詩情をもつだけの、否定できない懐旧の念にも似た貧である。

4. まとめ

以上見てきたように、人間が母語の言語表出によってある概念を表そうとした場合、辞書を用いて外国語に翻訳できる概念の普遍性と、外国語に翻訳できない概念の外延があることが分かる。その普遍性からはみ出している部分を仮に文化の領域とするなら、人間が母語を獲得し概念形成を言語によって認識していく段階において、その文化の領域からの侵食は甚だ大きい。ことばがもつ意味は常に流動的で、言わばアメーバのような増殖を繰り返しながら、文化の発展とともに概念そのものの変動を可能にしているのである。

従って、言語によって表出された概念を固定的に見るのは危険である。人間が生きるということは現在の否定であるが、それは今この瞬間に否定されるべき現実があるということに他ならない。即ち、いかなる言語を用いて表出されようとも、そこにある世界はもはや古いのであり、通り過ぎた概念として浮遊しているに過ぎない。ならば、そこから何を学ぶのか。それは、もはや過去の産物である概念から新しいものを創造していくこと、これしかないのである。

第二言語習得を目指す根拠もそこにある。ある民族が共通してもつ母語で表される概念は、個人差はあるにせよ、辞書で外国語に置き換える枠よりもはるかに広い世界をもつ。そして、母語を同じくする者同士は、概念の外延にある部分の共有をある程度可能にしている。その共有を生むものは、知らず知らずのうちにすり込まれる文化的要因であり、歴史的要因であり、社会的要因である。母語に選択の余地はない。人間が生まれたその環境で使用されている言語を拒否できない以上、その言語体系をそっくりそのまま引き受けざるを得ない。従って、その言語体系に組み込まれている要因の複合性から、一つの概念の背景を知ることになるのである。第二言語を習得するということは、正にその言語を支える背景を知ることにある。辞書で置き換えられるものと置き換えられないものがあることを知り、ある概念の外延を徹底的に追究する姿勢がなければ、第二言語習得は中途半端に終わる。教室言語で終わってしまえば、その国、その民族、その人間から生まれた世界を完全に理解することにはならないのである。

日本人はこれまで多くのロシア文学、ロシア演劇、ロシア音楽、ロシア美術を愛してきた。中でもドストエフスキーとチェーホフは愛好者の数から言っても双璧である。しかし、19世紀帝政ロシアでロシア語によって書かれた文学作品の声は、果たしてどれだけ日本人に届いているのであろうか。翻訳で読まれてきた文学の世界が、日本語ゆえの限定的な概念を表出していたということはないのであろうか。文化を異にする世界には、たとえば、どんなに名優であっても欧米系の役者には紋付袴に髷姿の侍が似合わないように、どうしても違和感を抱かざるを得ない深い溝がある。ロシアの大地とマロース（極寒）に育まれた生きる力と、狭い国土に四季折々の自然を感じながら生きる力に、何かしら言語表出では補いきれない差異があるのは当然である。そして、その差異は明らかに埋め合わせがきかず、文化的背景を

異にする人間同士の余白になっているのである。

畢竟、異文化間コミュニケーションには限界があるのかもしれない。人は何人たりとも複数の異文化を同時に背負って生きていくことはできない。たとえバイリンガル、トリリンガルであったとしても、複数の言語を同時に使用しながら生きていくこともできない。ならば、言語では表出しきれない概念の外延にある独自性を、互いに尊敬し認め合うことこそ、本当の意味での異文化間コミュニケーションではないだろうか。第二言語習得過程で見えてくる、概念把握の限界を知ることによって、普遍性の向こう側にあるものに尊敬の念を抱くこと、これこそが相互交流の原点である。そして、人間一人一人にある掴み所のない“こころ”は、いつの時代も掴み所がないからこそ面白く、そんな簡単に分かってはいけない人間の心情がそこにあるのである。

引用文献

1 モーリス・ブランショ、ジャン・ポーラン、内田樹（野村英夫、山邑久仁子訳）『言語と文学』書肆心水 (2004)
2 芥川龍之介『蜘蛛の糸・地獄変』角川文庫 (1989)
3 川端康成『雪国』岩波文庫 (1968)
4 志賀直哉『小僧の神様』岩波文庫 (1967)
5 島崎藤村『破戒』新潮文庫 (1987)
6 森鷗外『雁』新潮文庫 (2008)
7 三島由紀夫『花ざかりの森・憂国（橋づくし）』新潮文庫 (1992)
8 夏目漱石『坊ちゃん』新潮文庫 (1950)
9 夏目漱石『こころ』新潮文庫 (1984)
10 島崎藤村『千曲川のスケッチ』新潮文庫 (2004)
11 三島由紀夫『天人五衰（豊饒の海・第四巻）』新潮文庫 (2003)

参考文献

1 風間喜代三、上野善道、松村一登、町田健『言語学』東京大学出版会 (1993)
2 真田信治、渋谷勝己、陣内正敬、杉戸清樹『社会言語学』おうふう (1992)
3 池田弥三郎編『日本語の常識大百科』講談社 (1982)
4 井筒雅風、樺島忠夫、中西進共編『21 新国語総合ガイド改訂版』京都書房 (2005)
5 立川健二、山田広昭『現代言語論』新曜社 (1990)
6 酒井邦嘉『言語の脳科学』中公新書 (2002)
7 立川武蔵『空の思想史』講談社学術文庫 (2003)
8 金田一春彦『日本語（上・下）』岩波新書 (1988)
9 吉本隆明『日本語のゆくえ』光文社 (2008)
10 吉本隆明『芸術言語論への覚書』李白社 (2008)
11 野内良三『日本語修辞辞典』国書刊行会 (2005)